中央大学政策文化総合研究所年報　第 23 号（2019）pp. 27-46

戦争と文学

――日本浪曼派について――

廣　岡　守　穂*

War and Literature on Japan Romantic School during WW II

HIROOKA Moriho

Yasuda Yojuro was a famous literary critic. He was the leading figure of Japanese Romantic School and he wrote numerous essays on many magazines during WW II. His essays were expressed with tone of presentiment of ruin, so they may stimulate anti-war sentiment instead of raising morale. Nevertheless, Yasuda had many enthusiastic young admirers. The reason is that it meant death for young men going to war. In Japanese traditional culture, it was a virtue for a warrior to have no fear for death. People preferred to praise those who were stuck with misfortune against the wise person who of resourceful mind who musters the courage to confront enemy. Young readers received Yasuda's essays as a guide for meeting their death calmly.

キーワード：保田與重郎，日本浪曼派，亀井勝一郎，火野葦平，軍国美談，ワシントン体制
Key Words: YASUDA Yojuro, KAMEI Katsuitirou, HINO Ashihei, Japan Romantic School admirable stories of officers and men, Washington System

1. 保田與重郎がわかるということ

若いころのことだが，保田與重郎はいくら注意深く読んでも，まるでわからなかった．40 歳すぎて久々に読み返してみたときに，やっと少しわかったような気がしたものであった．たとえば『日本の橋』『和泉式部私抄』『民族と文芸』などには，思わず感心するような知見が随所にちりばめられており，これが保田の魅力なのだろうかと漠然と感じたのである．

しかしその一方で，保田の文章には口にするのがはばかられるような血腥い雰囲気がただよっており，少しわかったような気がしたということは，保田に近づきたくない理由が

＊　中央大学政策文化総合研究所研究員，中央大学法学部教授
Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University; Professor, Faculty of Law, Chuo University

わかったということでもあった．たとえば1938年に刊行された『蒙彊』を読んでいると，あるところでは漢民族が自国の民衆をくり返し大量虐殺したことが書かれている．別のところでは，戦場の武士の礼儀は全体を虐殺するか虐殺されるかであるとし，そういう態度に対するかなり高い調子の賛美が書かれている．そしてそういう記述の平面上に人民を酷使して巨大な建造物をつくった英雄の事績に対する賛歌がうたわれている．この「巨大な建造物」は直接的には万里の長城であり，エジプトのピラミッドをさしているわけであるが，言外に響いているのは，日本の満蒙経略もまさしく現代における「巨大な建造物」ではないかというささやきである．

こういう文章が戦時下の尋常でない精神的雰囲気の中で，出征を控えた若い男たちにどんな風に迎えられたか，わたしは想像できるような気がしないでもない．前線で生死をかけて闘う兵士たちの，その無言の行為のひとつひとつが，民族共同の全体行為として，歴史的で英雄的な事績そのものなのだと保田與重郎は語っているわけである．

戦争を民族共同の全体行為として賞賛するという主張であれば，どこにでもみられることである．たとえばロシアの文豪ドストエフスキーも先頭にたってトルコとの戦争を叫んだ．ドストエフスキーはロシア民衆が戦争に託す思いのなかに民族の全一性を耕すかけがえのない土壌をみていた．ドストエフスキーの語り口と保田與重郎の語り口を比較してみると，強烈な自国中心主義を前面に押し出していることは共通しているのである．しかし同時に際だった違いがあることも指摘しておかなければならない．それはドストエフスキーが国際政治に強い関心を持ちヨーロッパ各国の動静や内外の政治家と知識人の発言を注視しているのに対して，保田與重郎はそういうことにほとんど関心を持たず，むしろ政治に背を向けている観さえあることである．保田與重郎が引照するのは，日本の過去の英雄たち，それも敗者となった英雄たちが少なくないのである．だがその違いの意味はおいおい考えることにしよう．

とにかく戦闘はまがりなりにも殺人行為である．もとはといえば兵士も，つい昨日まで年老いた親といっしょに畑をつくっていたり，大店に丁稚奉公していたり，工場で旋盤を操作していたりしていたのである．職業的な武人ではない．それがきょうは銃剣を渡され，敵を殺すように命じられる．ふつうこういうことを語るときには，我人（われひと）ともに言い聞かせるような，切羽詰まった倫理的な煩悶が見えかくれするものなのではないだろうか．たとえば『蒙彊』とおなじ年に火野葦平の『麦と兵隊』が出たのであったが，その主人公は，中国兵を斬殺する場面を正視できず，正視できなかったことで自分は悪魔になっていなかったと胸をなでおろす．物語の最後の場面である．悪魔になっていなかったとほっとする，それが人間の自然の情というものだろう．ところが保田の口調にはどこか他人事を語っているかのような超然たる響きがある．それが保田のいうデカダンスやイロニーなのであろ

うが，わたしは読んでいて度々，この人が軍人だったらどんな残虐行為でも平然とやってのけたのではないかと空恐ろしい気分になったものである．ロマンと冷血の併存，保田與重郎の文章には，冷酷な嗜虐性がひそんでいるように感じたものである．わたしが保田與重郎の文章に血腥い雰囲気を感じたというのは，かいつまんでいうと，こういうことである．

2. 亀井勝一郎との比較

これはおなじ日本浪曼派でも亀井勝一郎にはない資質である．亀井には保田のような冷酷さは微塵もない．亀井は救済や慈愛を求めるが，その思考は内省的でいつも窮屈なくらいに懺悔や自罰に向かっている．亀井の文章に接して読者が感じるのは，自分をさいなむことばがいかに多いかということである．転向をへて文筆家として名をなしたのであったから，自己批判が亀井の名にこびりついているのは不思議でないとはいえる．そうだとしても，マルクス主義から仏教への思想移動，文芸評論や美術論から恋愛論や人生論まで，さらには晩年の日本人の精神史研究まで，亀井のほとんどの著作の基調をなしているのは自己分析であり，自己否定と自己放棄への希求であり，帰依の願望である．帰依と自己放棄の対象が，マルクスから仏陀へ，労働者階級から衆生へと転回したのである．

そういう文章を読み慣れたものの目にいかにも異様に映るのは，敗戦直前に書かれた『日月明かし』である．これはパンフレットくらいの薄い本で，故郷の人，隣人，或る指導者，田舎の友に宛てた４通の手紙からなっている．第一の「故郷の友」に宛てた手紙の冒頭で，焼け野原になった東京に暮らしている人びとが屈託のない表情でいることが賞賛されている．「都心はたしかに廃墟です．しかしこの廃墟という感じには，陰惨なものは少しもありません．むしろひそかな，人を思はず微笑させるやうな希望が隠れてゐる」[1]．亀井は灰燼になったまちを歩きながら，「しめた」と思ったと書いている．しめたと感じて，ひそかにほくそ笑んだというのである．

空襲で家財産を焼かれた人びとのなかには，大切な人を失った人も多かった．そういう人たちが焼け跡に粗末な小屋をつくってくらしている．人びとは悲嘆にくれ，絶望の淵に沈んでいただろう．そういう人びとがどんなに絶望的な思いをしていたかには目もくれず，廃墟に陰惨なものはないといいきり，人びとの姿に希望があるというのだから，驚くしかない．わたしははじめてこのくだりを読んだとき，思わずわが目を疑ったものだった．

『日月明かし』はあきらかに，敗戦が不可避であることを見越して書かれている．書かれていることは，戦意高揚に役立つとは思えない内容である．よくもこういう内容のものを本にしようと思い立ったものだと思うし，すさまじい自己顕示欲だとも思うし，戦後の処

世にそなえる計算があったのではないかとも思う．いずれにしても1945年のいつかはわからないが，東京大空襲があった3月10日以後のあるときに，亀井はいまの自分の心境を書きつけておこうと決心したのである．

人びとの姿に「希望が隠れてゐる」というのは，戦争に敗れても，日本人は民族の伝統を生かしながら，したたかに生きのびていくだろうという意味である．「罹災した人々は焼跡に小屋を建て……，早くも菜園が拓かれ……，茶人は焼けかゝつた古材を集めて茶室を建てることを考へてゐます．すべて日本人にとつてあたりまへの生活態度なのです」[2)]．空襲で家を焼かれても，人々はなにごともなかったかのように，淡々と日常生活に復帰している．戦争に勝とうが負けようが，とはいまは口が裂けてもいえないが，日本人はなんとしたたかに生きつづけていくだろう，というわけである．そこで亀井は「この廃墟という感じには，陰惨なものは少しもありません」と述べる．

そう書いているとき，亀井は何十年も未来の時点にたって現在を展望するかのような視点にたっている．これは保田與重郎が『蒙彊』で，中国の何世紀もの過去をふりかえり，漢民族が自国の民衆をくり返し大量虐殺したことと，英雄たちが人民を酷使して巨大な建造物をつくったことを等し並みに賛仰していることと同質の視点である．一見，客観的，巨視的であるが，それは一人ひとりの人間のなまなましい感情や経験を捨象することによって成り立っている．海を渡った大陸で，兵士になった日本の庶民がどんな気持ちに揺れているかとか，空襲で家を焼かれた人々が，どんな気持ちでくらしているかといったことから，よほど大きな距離を置かなければ書けない種類の文章である．つまり現実から乖離しなければ書けない文章である．

しかし亀井と保田が似ているようにみえるのはそこまでである．『日月明かし』に表現されているのは，冷酷さではない．表現されているのは，極限まで張りつめた心境である．追い詰められ進退窮したあげく，土壇場で開き直ったものの心境である．だから『日月明かし』は露出過度のような明るさで書かれていて，読者に異様な印象をあたえる．くり返しになるが，保田與重郎には亀井のような性質はない．

そういう資質のちがいはひとまずおいて，ここではまず日本浪曼派と戦争について，二，三の論点に触れることからはじめたいと思うのである．

3. 指導者と民衆

日本浪曼派は日中戦争から太平洋戦争に至る長い戦争の時代において，若い知的な世代が戦争に処する心的態度を形成することに深い影響を与えた．戦争を遂行する思想的な立場は見かけ上はいくつもあった．曰く日本主義，曰く皇道主義，曰く昭和維新，曰く国家

主義，曰く世界史の哲学などなど，これらは先頭にたって戦争遂行を怒号した人びとの旗印だった．しかしほとんどの日本人は自らすすんで戦争を要求したわけではなかった．戦争のような政治的決定に関して民衆が指導者の決定に影響を及ぼすことはない．つねに民衆が指導者の言動に煽られる．いくら民衆がいきりたっても，そもそもの火付け役は民衆ではない．関係は一方向的なのである．

保田與重郎は民衆と指導者のこのような関係など存在しないものとして，民衆と指導者を一体のものとしてとらえる．そして政治的意志決定に対して，いくらかでも異見をとなえたり反対行動をしたりする人びとを排斥する．このとき使われるのが「知識人」ということばである．異見をとなえたり反対の行動をおこしたりするものは，頭でっかちでひ弱なものたちとして描かれ，それに対して若々しく力強い青年が対置される．それゆえ保田の思想は反知性主義と呼ばれるのである．

他国との対立が激化すると民衆は戦争を叫ぶことが少なくない．戦争を目の前にすると，どこの国でも，民衆はおなじような反応をみせるものである．エミール・ゾラの小説『ナナ』は，最後に対独復讐に燃え上がるパリの民衆の姿を描いている．彗星のように登場した新人女優ナナは，やがて高級娼婦として上流階級の男たちを次々と虜にして破滅させていくが，突然姿を消してしまう．そして普仏戦争直前のパリに再び姿をあらわす．しかしそのときには，ナナは天然痘によって醜い姿に変わりはてていた．死の床に横たわるナナが今際のときを迎えようとしていたとき，パリの街頭では対独開戦を求めて民衆がいきりたっていた．「ベルリンへ，ベルリンへ」，興奮した民衆の叫びが街頭にこだましていた．このように国際関係が緊張すると民衆はしばしば激高する．民衆は乾燥した枯れ草のように火がつきやすいが，その火種は民衆が自分でつくるわけではないのである．

1931 年 9 月 18 日に満州事変が勃発した．陸軍は連戦連勝，破竹の快進撃をしていた．そのとき国民は喝采を送った．戦勝の報がとどくと，そのたびに各地で祝賀行列がおこなわれた．このとき合い言葉のように叫ばれたスローガンが「満州は日本の生命線」だった．このことばは同年 1 月，すなわち満州事変が始まる 8 ヶ月前，第 59 回帝国議会で，松岡洋右が幣原協調外交を批判する演説でもちいたことばである．マスコミはそれに飛びつき一種の流行語になった[3)]．

32 年 1 月には，日本軍は張学良が本拠地としていた錦州を占領，同年 3 月に満州国の建国が宣言された．33 年 5 月に塘沽停戦協定が結ばれて軍事行動は一段落し，つかのまの平和が訪れた．ただしそれはみせかけの平和だった．この間，33 年 3 月に日本は国際連盟を脱退している．他方，国内では 32 年に 5・15 事件がおこり，それをきっかけにして軍部が露骨に政治に関与するようになる．35 年には天皇機関説問題がおこった．政治の雲行きはますます怪しくなり，いよいよ軍部の暴走に歯止めがきかなくなった．

37年7月7日に盧溝橋事件がおこり日中戦争がはじまって，つかの間の平和は破れた．戦争は日本側の当初の予想を超えて，いつ終わるとも知れない泥沼の様相を呈し，多くの日本人は行く手に不安を感じるようになっていった．37年に日中戦争が始まると，政府は挙国体制をつくるため言論界に協力を求め，新聞雑誌は競って特派員として作家を大陸に派遣した．兵隊として召集されたものもいたのはもちろんのことである．翌38年には，内閣情報部はペン部隊を派遣した．ペン部隊は陸軍班と海軍班にわかれて従軍した．さらに41年に日米戦争がはじまると，多くの文学者が徴用されて従軍することになる．こうして大量の戦争小説が書かれるようになる．

火野葦平は，そのなかから生まれた最大の人気作家だったが，すでに述べたように，彼をスターに押し上げた『麦と兵隊』（1938年）にしても，そのラストは戦意高揚の文学とは思えない終わり方である．主人公は三人の中国兵の銃殺に立ち会う．主人公はあまりのむごたらしさに思わず目を背ける．残虐な場面を凝視しえなかったことで，彼は自分は悪魔になっていなかったと，深く安堵する．つまりは『麦と兵隊』の主人公は，保田與重郎が『蒙彊』で主張したような考え方に染まるのを恐れているのである．『麦と兵隊』に登場する兵隊たちは主人公を含めみな善良な庶民である．100万部を超える一大ベストセラーになったが，それは人びとが小説に登場する兵隊たちを自分に重ね合わせて読むことができたからであった．

4. 軍国美談，爆弾三勇士，『大義』，『少年倶楽部』

満州事変で戦意を燃え立たせた民衆だったが，それならば戦勝に喝采を送った民衆が，戦争に対してどのような覚悟を求められていたのか．それをみておかないと保田與重郎が読まれた理由はわからなくなる．

火野葦平は人間味ある兵隊を描き出したが，軍が兵士に要求したのは家族愛やいたわりの感情ではなかった．「大君の辺にこそ死なめ」と，死を恐れぬことであった．1941年1月に東条英機陸相が示達した「戦陣訓」に「生きて虜囚の辱を受けず」との文章があることはよく知られている．兵士として戦場に出たら，死を恐れず勇敢に戦うこと，それが若い男たちに要求された覚悟だった．

戦死した軍人を「軍神」としてたてまつるのは日露戦争で戦死した広瀬武夫中佐がはじまりだったが，満州事変のときには，1932年に上海で戦死した3人の工兵が「爆弾三勇士」として称揚された．そればかりでなく，満州事変がはじまると，戦死した兵士の美談が頻々と伝えられるようになった．その都度国民は心をうごかされたのである[4)]．

印象的なのは，広瀬中佐が軍功をたてて戦死したわけではないことである．部下を思い

やる気持ちがかれを死に追いやったのであった．それにしても戦場で武勲をたてた兵士より，悲運に倒れた兵士ばかりが称揚されたのは，世界的にみていかにも特異な現象であった．たとえば4分の1世紀以上の長きにわたって日本で医学を教えたエルヴィン・フォン・ベルツは広瀬中佐の国民葬がおこなわれた4月12日に，広瀬が中佐に昇進したことについて，死後の表彰はヨーロッパ人には不可解だと述べている[5)]．

死の賛美は，昨日今日にはじまったことではなかった．大人の間ばかりではない．小学校の修身教科書には，死んでもラッパを離さなかった木口小平のエピソードが載っていた．木口小平は日清戦争で戦死した．その物語は1903年からはじまった国定教科書にのせられ，1945年まで学校の授業で語られつづけた．『少年倶楽部』はたいへんよく読まれた少年雑誌だったが，1930年代前半には，まだまなじりを決したような雰囲気はない．しかし，それでも1932年4月号には爆弾三勇士の速報記事が載っている．そして5月号では，口絵に陸軍歩兵少佐今村嘉吉画「あゝ爆弾三勇士」が掲載され，「爆弾三勇士涙の追悼会」という記事もみえる．同誌に連載されていた漫画のらくろは「爆弾三勇士」を題材とした話を書いている．さらに付録には「廣瀬中佐の銅像セット」があり「軍神廣瀬中佐」という記事がある．敵愾心をあおる記事はみられないけれど，死を顧みない態度を称賛する記事は，すでにたいへん目立つのである．

軍国美談は悲運に倒れた将兵を悼むことによって，国民全体の共同感情を強めた．そこには主君のために命を惜しまずに尽くすという武士道の規範意識や，義理人情の感情が働いていた．それはすでに人形浄瑠璃や歌舞伎の時代ものにおいて，最大の主題のひとつだったのであるが，明治になると，そういう意識や感情はしばしば日本人の特殊性や優越性の主張と結合するようになった．たとえば中国の儒教では忠と孝は別物だが，日本では忠と孝はおなじものであるという忠孝一本の主張がそれである．「死をみること帰するがごとし」「大君の辺にこそ死なめ」と，兵士には死を恐れぬことが要求された．それは日本男児の他に例をみない美徳であるべきだった．

天皇への帰一や生死の境を超える覚悟は日本主義や皇道主義の人びとがしきりに主張していた．ベストセラーになった杉本五郎の『大義』は死の覚悟を濃厚にただよわせている．この本もやはり1938年に刊行されたが，その前年の37年に，杉本五郎は中国戦線で戦死している．陸軍中佐であった．こういういきさつから，『大義』は杉本の遺書と受けとめられ，大ベストセラーになった．

こういう思想は中国の儒教との対比ばかりでなく，欧米の道徳と対比されるとき，いっそう調子が高まり，個人主義批判や資本主義批判にかたちをかえることになる．前述の松岡洋右は，欧米人は家族のためにたたかう，国のためにたたかうということを知らない．それというのも欧米人は物質文明のために個人主義と資本主義に毒されているからだ．か

れらは忠孝ということを知らない．そのうえ最近は女性までが貞を忘れてしまった．こんな文明が長続きするはずがない，と語っている[6]．

5. なぜ厭世観をにじませる保田與重郎が読まれたのか

さて，日本の軍国主義の底辺をひたした死の賛美の思想について述べてきた．それは文楽や歌舞伎の時代ものにもさかのぼることができるかもしれない．日本の庶民の間にも，比較的広くいきわたった思想だった．もちろんそれは保田與重郎にもあった．ただし杉本五郎や松岡洋右とはあきらかに表現方法が違っていた．

どう違うかというと，思想の内容が違うのではない．語りかける相手が違うのである．保田の文章は，いさぎよく死にゆくものを鼓舞するというよりも，死の定めにあるものを慰撫するとでもいうような性格をもっているのである．

橋川文三は保田が読者を惹きつけた理由について，「保田がある時期に殆ど呪術的な魅力をもって一世を風靡したことには，その文体のもつ性格が与って大きかったからである．それはたしかに異様な文体であった」[7] と述べている．では文体とはなにかといえば，その実質は読者が違うということなのである．

たしかに保田の文体は異様である．しかし，保田の文章が若者のこころをつかんだ理由を見出すのは少しも難しいことではない．保田の文体に異様な印象があるのは，死の受容を自明のこととしているからである．杉本五郎の『大義』は死の覚悟を天皇への帰一に結びつけて執拗に繰り返している．繰り返し繰り返し自分に言い聞かせる姿をみせなければ，読者も感情移入できないだろう．ふつうの人はどんな理由であれ，よろこんで死ぬことなどできることではないからだ．自分の死どころか，他者の死についても平然と直視することはできない．火野葦平の『麦と兵隊』の主人公は自分が死を直視できなかったことにほっと胸をなで下ろしている．それがふつうの人間の感情というものである．

ところが保田與重郎の文章は，死の覚悟ができているのは当たり前という立場で書かれている．まして人を殺すことにいちいち情をうごかされることはない．平然と直視していればいいだけのことだ．満州で兵士の眼前に展開しているのは殺戮の光景だと思う必要はない．それは滔々たる歴史の流れがつくりだす数かぎりない光景のひとつにすぎない．若い兵士は銃を持ってその世界史的な現場にたっているのだから，敵を殺せばいい．そのかわり君も殺されるかもしれない．それだけのことだ．というわけである．

杉本五郎の『大義』にくらべると保田の文章は冷めている．ときには滅びの悲哀を予感させる響きがあり，戦争に勝つことさえ相対化しているような厭世観をうかがわせることがある．戦場にむかう兵士が読むよりも，死の床にある病人が読むのにふさわしいような

トーンである．

死の床にある病人が読むのにふさわしい文章と書いたが，実のところ，それが真相を言い当てているのだと思う．1918 年生まれの神島二郎や，1924 年生まれの吉本隆明が書いているように[8]，1937 年から 45 年にかけて成人した世代の男子にとって，出征と死は逃れることのできない運命のようなものだったからである．若い男子は戦争になれば，だれよりも先に兵隊として従軍させられる人びとである．前線に出れば死が目の前にただよっている．

彼らにとってみれば，銃をとって戦うことが，そして戦場に倒れることが，運命であり義務であることを，自分自身に言い聞かせることのできる思想が，それもたんなる標語やスローガンではなく思想が，重要だった．戦場にたつ若い兵士が二十歳そこそこで人生を終わらせる覚悟をしなければならないとすれば，それは死期を迎えた病人が従容として死を受容することと似通ってくるのは当然なのではなかろうか．

そういう若い知識層にもっとも強い影響を与えたのは京都学派の「世界史の哲学」と並んで日本浪曼派の文学であり，なかでも保田與重郎の影響力は圧倒的だった．三島由紀夫は『私の遍歴時代』の中で，保田の文章は「あの時代の精神状況を一等忠実に伝える文体だったという気もしている」[9] と回想している．三島由紀夫は 1925 年生まれであったから，日米開戦の年には 16 歳だった．いささか早熟な少年だった．

たしかに三島のいうとおり，戦時中保田與重郎は引っ張りだこだった．保田の文章が載らなかったら雑誌の販売部数が減少するといわれ，保田はあちこちの雑誌に書きまくった．1940 年から敗戦までの 5 年間になんと 600 本以上の論文を書き 20 冊以上もの単行本を出している．だからといって直ちに十代の少年だった三島のとらえ方が正しいとは言えないが，少なくとも一部の若い読書層に対して保田の文章が強烈な魅力を発したのは間違いない．出征していく若者たちの心にそのことばは，いかなる将軍のことばより深くしみとおったようである．

保田が若い人びとの心をとらえた理由は，三島由紀夫のような同時代の若者であれば，不思議ではないのであろう．しかしいまとなっては，かんたんには胸にも脳にもしみこまない．保田與重郎は，『新古今和歌集』をはじめとする古典への回帰を訴え，日本武尊や後鳥羽院ら「偉大な敗者」を讃え，明治維新以後の近代の日本史は欧米に侵略される歴史だったと主張した．反近代と反知性主義をとなえたのである．

だがひと目でわかるように，これらの要素はどれもこれも，社会生活を営むうえにあってもなくてもかまわないものばかりである．社会生活に求められるのは，勤勉，実直，合理主義，社会公共への関心等々といった徳目である．これらの徳目にくらべたら，まったく非実務的である．多少とも現実的な処世観の持ち主なら，眉をひそめこそすれ容易には

共鳴しない主張である．

なにより，戦時なのである．そもそも戦争は，もっとも組織された社会生活である．一瞬たりとも油断しない心がけで軍務に励まなければならない（勤勉）．嘘偽りは禁物である．虚偽の情報は情勢判断を誤らせる（実直）．勝利という目的に向けて高度に合理的でなければならない（合理主義）．外地に出れば，現地の人びとを味方につけるにはどうしなければならないか，大所高所から判断できなければならない（社会公共への関心）．しかるに保田與重郎の文章にはこれらの要素はひとかけらもない．保田が語っているのは，これらとはまったく正反対のことがらばかりなのである．そして驚くべきことに，そういう保田の言説がジャーナリズムの争って起用するところとなり，多くの若い読者を惹きつけた．政府も軍も保田を有害無益な存在とはみなさなかった．

保田與重郎が語った思想は，死を目前に予期してでもなければ，受け容れることの難い思想である．軍事的には無益か，むしろ有害な思想である．にもかかわらず1930年代後半から，保田はジャーナリズムに引っぱりだこになったのである．このことは日本の戦争指導体制と軍事思想にきわめて大きな欠陥があったことを抜きに説明できないだろう．実際，前線の兵士の処遇，人命軽視，特攻，兵站軽視，装備，戦傷病者の扱いなどなど，さらには女性を徴兵しなかったことも含めて，日本の戦争指導と軍事思想には非合理的なところが目立った．それらのこととあわせて考えなければならないことであろう[10]．

6. だれが民族の事業に参加するのか

保田の文章が響かせているのは，英雄の事業や詩人の芸術と物言わぬ民衆の行動を同一の平面上でとらえていることである．保田はまるで古代エジプトのファラオたちの事績を語るような口吻で戦争を語っている．どういうことか，保田の論理をわたしなりに言い換えてみると次のようになる．ピラミッドをみる人はその威容に胸を揺すぶられ，それを建設したファラオの偉業に思いを馳せる．さらに人びとは，建設作業に従事した何十万人もの民衆のうえに想像をめぐらす．彼らの労役なくしてピラミッドは完成しなかった．だから民衆はファラオに使役されたのではない．ファラオの事業達成に不可欠の要素として献身的に参加したのである．

保田はこれと同じような論理で，戦争と兵士を民族の不可分の部分として扱う．ちょうど唯物史観によれば，どんな政治的行為もどんな芸術的創造も経済構造によって規定されているように，保田によれば，兵士の戦闘も詩人のうたも英雄の敗北も，混然不可分の一体として何世紀にもわたる民族の共同性を構成しているのだ．ここでは兵士と英雄は等価である．つまり保田のロマン主義には兵士と英雄を等価にみるラジカルさがある．これを

裏返すと，マルクス主義が労働者階級と革命指導者を等価にみる論理とおなじような構造がみえてくるだろう．

ちなみにこういうところがドストエフスキーと似通うところである．ドストエフスキーも，農奴から皇帝までをつつみこむスラブ民族の全一的な統合をとなえた．そして西欧派の知識人を民族の一体性を破壊する存在として批判した．このあたりの構図は，天皇と民衆を一体化し，発言する知識人を無力で誤った存在として排斥した保田與重郎とおなじである．

しかし兵士と英雄が等価であったり，皇帝と農奴がおなじ全体の中に融合したり，労働者階級と前衛党が等価であったりすることは，なんらかの論理的な操作なしにはできない．マルクス主義でいえば唯物史観という論理によって労働者と革命指導者や前衛党は，ひとつに合体して歴史を前に進める力になるのである．ドストエフスキーが主張する民族の一体性にはギリシャ正教の理念がただよっている．もちろん保田もそういう操作をしているが，保田が活用するのは，なんと「詩」である．たとえば次のように書いている．

「明治以後の浪漫主義の運動は，この昭和七八九年ごろに再び起つたのである．昭和八九年ごろと云へば，六年の満州事変，昭和七年五月事件，やがて十一年の東京事件につゞく期間である．当時の国家の状態は，肉体による詩的表現によってしか救いがたい位に頽廃してゐたのである．しかもさういふ表現は時代を風靡した社会主義によつてされず，日本主義者の詩的挺身によつてされたのである．このとき文学上の新運動は所謂日本浪曼派といふ宣言から出発した」[11]．

保田はここで何を語っているのかというと，満州事変と5・15事件（昭和七年五月事件）と2・26事件（十一年の東京事件）を並べて，そういうクー・デター未遂事件がおこったのは「当時の国家の状態は，肉体による詩的表現によってしか救いがたい位に頽廃してゐた」からであると意味づけているのである．そうして国家の退廃を糺そうとする行為は社会主義者によってではなく日本主義者によっておこなわれたと主張しているのであり，さらに大陸で軍事行動をおこしたり首都でクーデター未遂事件をおこしたりした軍人たちと，日本浪曼派の文学者たちとを同じ性格を持つものと位置づけているのである．『日本浪曼派』は1935（昭和10）年3月に創刊されたのであった．

しかし，それにしても，どうして戦争やクーデターが「肉体による詩的表現」なのであろうか．保田がこのことばでおこなっているのは，組織的な軍事行動を兵士個人の直接体験に還元してしまうという操作であり，その個人的体験が国家を退廃から救おうとする公的政治的な行動なのだと意味づけることである．一度個人の体験に還元してから，もう一度政治的できごとに戻すという操作をおこなっているのである．もちろん戦争やクーデタは断じて「肉体による詩的表現」などではない．こういう論法は良くいえば文学的表現だ

が，あからさまにいえばでたらめである．論理のすり替えであり飛躍である．

こんなにたやすく飛躍してしまう理由はほかでもない．保田の政治に対する洞察が美学や国文の知識にくらべて釣り合いがとれないほど貧弱だからである．そしてそれほど観念的な主張がどうして当時の若者の心をとらえたかといえば，もちろんほかでもない．読者である若者自身の政治認識が保田與重郎とおなじくらいに，あるいは保田與重郎に輪をかけて貧弱だったからである．貧弱というより，いつ徴兵されるかわからない，徴兵されて戦場に出たら死ぬかもしれないということの意味を見つめるほうがはるかに差し迫っていたからである．政治を考えることなど，自己の死を見つめるリアリティにくらべたら，ほとんど何の意味もなかったからである．

7. 日本浪曼派はワシントン体制の落とし子

ドストエフスキーも保田與重郎とおなじように，民族の伝統に依拠し，排外的なスラブ主義の叫びをあげ，戦争を求めた．しかしドストエフスキーは現実政治のうごきをしっかり注視していた．東方問題，つまり衰退するオスマン・トルコをめぐる外交問題について，ドストエフスキーは諸国の動静を観察し，『作家の日記』のなかで繰り返し繰り返し取り上げ，その都度熱心にロシア外交を擁護している．だがこれにくらべると保田の現実政治への関心は実に乏しい．ドストエフスキーとはちがって，大臣が何と発言したかとか，大将がどんな行動をしたかといったことにはまったく関心がないのである．日中戦争のさなかであっても，英米やソ連がどのような態度でのぞんでくるかとか，華北分離工作はどうなるかについて論じるわけでもないし，張学良や馬占山といった名前さえも登場しない．まるで重病患者が病院のベッドの中で，迫り来る自己の死を待ちつつ，民族の来し方行く末に思いを馳せているかのような書きぶりなのである．なんというちがいだろうか．

わたしたちは，いったん保田の側から政治の側に視点を移してみなければならない．

保田與重郎，そして日本浪曼派はワシントン体制の落とし子だった．保田與重郎は1910年生まれ，亀井勝一郎は1907年生まれである．そして伊東静男は1906年生まれだった．中谷孝雄と浅野晃は1901年生まれで，同人の中では年長だった．日本浪曼派の近くにいた蓮田善明は1904年生まれである．ワシントン会議は1921年11月から22年2月まで開かれたが，この人びとの多くは，そのときには10代だった．最年長の中谷と浅野が20歳，最年少の保田は11歳だった．

第一次世界大戦後，ヴェルサイユ条約やサン・ジェルマン条約によってつくられたヨーロッパの国際秩序をベルサイユ体制という．英仏主導でドイツ制裁とソ連孤立化をかなめとしたが，同時に国際連盟が設立され国際協調がうたわれた．これに対して東アジア，太

平洋における国際秩序をワシントン体制という．アメリカの提唱で 9 カ国の代表がワシントンにあつまり会議が開かれた．会議の結果，海軍軍縮条約が結ばれ，4 カ国条約により，太平洋の現状維持がうたわれ，日英同盟が解消した．さらに 9 カ国条約で，中国の門戸開放が承認され，日本は山東省の旧ドイツ権益を返還した．

ワシントン体制はこれまで躍進してきた日本に欧米列強が初めて立ちふさがったことのあらわれだった．そのうえ第一次大戦後は民族自決や民主主義が広く受け容れられるようになり，日本はその対応に苦慮することになった．直接的には，あまりにも乱暴な対華 21 カ条要求を袁世凱政府に突きつけたことのつけが，さっそく回ってきたのである．19 世紀後半の帝国主義の時代に国際社会に踏み出した日本は，帝国主義的な外交を欧米列強から学んだ．1920 年代までは外交問題では外務省が軍部よりずっと強硬だったのである．だがそうやって習得した外交姿勢が，第一次大戦後には時代遅れのものになりかかっていた．

そうはいっても権力政治のアプローチそのものが時代遅れになったわけではない．それは満州事変について，列強が日本の行動に対してある程度の理解を示したことからもうかがえることである．民族自決や民主主義が国際政治の原則として大きく浮上してきたことに，日本外交が対応できなかったのである．それは山県有朋が，中国に共和国が誕生すると日本は米中というふたつの共和国に挟まれることになる．それは絶対に避けなければならないと語ったことに象徴される．ふたつの共和国にはさまれることを恐れるとは，なんとナイーブな感覚だろうか．1928 年に締結された不戦条約では，次のようなこともおこった．「人民の名において厳粛に宣言する」という文言があったが，国内で，それは大日本帝国憲法に違反するとの批判がおこった．結局政府がこの部分は日本には適用されないと宣言したうえで，条約は批准されることになった．

もともと大日本帝国憲法は君主の権限がきわめて大きなつくりになっていた．しかしまがりなりにも立憲君主制であったから，ともすれば国体をふりかざす人びとから批判を浴びた．井上哲次郎など国民道徳を推進した人びとは国体論を前面に押し出していたのである．かれらは天皇を憲法の上位に位置する至高の存在と考えていた．憲法学者のあいだでは天皇機関説は通説的な学説であったが，憲法学者のあいだにも穂積八束や上杉慎吉のように通説に反対する人たちがいた．そこへもってきて世界的にデモクラシーが受け容れられる時代になった．政治をどのように運営するべきかがなかなか難しい問題になったのである．19 世紀後半の帝国主義の時代に国際社会に踏み出した日本は，第一次大戦後，国際環境そのものが変化したことへの対応に苦慮することになったのである．国際社会の 19 世紀システムに適応した日本は，20 世紀システムへの適応に非常に苦労したのである．

8.「文明開化の論理の終焉について」

保田與重郎に戻ろう．保田には，これまで述べたような国際政治の変化について，世界的視野で大所高所から考えようとした形跡はない．保田は第一次大戦後，日本が国際的に孤立にむかったことを，ただ不可避の進行と至極単純にとらえていた．しかもそれは，保田によれば，明治維新以来の日本が突き進んできた道の必然の帰着だった．1930年代に，保田はそれを「文明開化の論理の終焉」と表現している．保田は『文学の立場』（1940年）に収録された「文明開化の論理の終焉について」と題する評論で，文明開化の論理が行き着くところまで行き着いたのがマルクス主義であり，文明開化の論理とはすなわち植民地文化であると述べている．そしてそう述べたあとにつづけて，日本の知性がこういう体たらくであるのに対して，日本の大衆はみごとな行動をおこしたと書いている．

「日本の大衆は新しい皇国の現実を大陸にうちたて，一切の現実をそれに表現した．この現実を描くための文明の世界構想の論理は文明開化の論理では間に合いにくい．すでに日本の大衆は新しい革新を要求している．明治以来の革新の論理がすべて文明開化の論理であったのに対し，今度の変革の論理は，文明開化と全然反対の発想をする論理であることを漠然と知っているのである．さうして，そのあるものは固陋の鎖国主義だと「知性」派によって断ぜられたのである．これこそ現実に即応し得ない旧来の植民地文化的「知性」のもつナンセンスのひとつの表現である．日本の文化の現実は，この二つの形で，旧来文章の発想を揚棄せねばならぬ日に臨んでいる」[12)]．

「日本の大衆は新しい皇国の現実を大陸にうちたて」というのは満州事変のなりゆきをさしているのだが，それは現地軍の軍事行動であって日本の大衆がおこした行為ではない．しかし保田はなんの躊躇もなく大衆の行動だと断言するのである．まるで大衆が戦争を企図し大衆が戦争を実行しているかのような口ぶりである．たたかいに使われた陸海軍の組織や兵器そのものが欧米から導入し摂取したものではないかと思うと，その途端に保田の主張には曖昧なところがみえてしまうのだが，それはともかくとして，はっきり伝わってくるのは西洋近代に対する敵意と明治以後の近代化に対する否定である．

この点では，1940年前後になると，亀井勝一郎も同様の立場にたつようになっていた．マルクス主義運動から転向した亀井にはもともと政治経済に対する関心は人一倍強かったのであるが，亀井は数年かけてゆっくり転向していく過程で，徐々に政治についての関心を放棄していく．それはいわば新人会から大和古寺巡礼への道であった．日米開戦の翌年，亀井勝一郎は「我々が「近代」といふ西洋の末期文化を受けた日から，徐々に精神の深部を犯してきた文明の生態――あらゆる空想と饒舌を生みながら速やかに流転していくこの

ものが，私には最大の敵であると思はれる」と述べている．保田もこの時期の亀井も，その眼中には日本外交や国際政治は映っていない．あるのは日本の近代を脱ぎ捨てなければならないという壮大な，いや壮大にみえて実は個人の観念レベルの認識である．

第二次大戦後になってから，亀井は第一次大戦後の状況について，明治以来の日本文明の悲しむべき性格が露呈したという認識のもとに次のように書いている．「『一等国』という意味のない自己陶酔，政治的感覚の極度の荒廃，侵略の野心，道徳と風俗の頽廃，精神の植民地化，内省におけるいっさいの厳しさの消滅」といった「途方もない妄想」を抱くようになったのだと[13] やっと目が覚めたといったふうな口ぶりである．亀井なりに，政治外交に対する問題意識を取り戻したのである．だがそれは敗戦という大きな代価を払ってであった．しかも上にあげた戦前と戦後のふたつの発言を注意深く対比してみればわかるが，結論は正反対だが，それを導く認識そのもの，つまり明治維新以後であるか第一次大戦以後であるかは別として，日本は心の深いところで病んでいたのだととらえるところは，変わっていない．

ちなみに日本浪曼派の同人ではなかったが，亀井勝一郎と同様に転向した林房雄もまた，19 世紀後半以来，日本はずっと欧米諸国とたたかってきたのだという考えをもっていた．しかも林は戦後になってからも，そういう思想を捨てなかった．保田與重郎が沈黙し，亀井勝一郎が古代文化史に没入していくのに対して，林房雄は 1964 年，『大東亜戦争肯定論』を書いて物議をかもした．林はその中で，日本は 1840 年代からはじまり 1940 年代に至るまで，約百年にわたって長い戦争をたたかったのだと論じ，それを東亜百年戦争と名づけている．日本は 1840 年代以来，西欧列強の攻撃にさらされつづけてきたのだというわけである．戦中には，林房雄のような認識がかなり広く共有されていた．林房雄は敗戦後もそのとらえ方を抱懐しつづけ，ついに 1964 年に，上下巻 500 ページに迫る大著を書きあげたわけである．

9. 文学者の関心と社会意識

保田の文芸評論はきわめて時局的である．そうでありながら，しかも現実政治に対して実証的な関心を払っていない．一国民として時局に対する身の処し方を論じているのである．

わたしが保田らをワシントン体制の落とし子と規定したのは，西洋文明を自分たちに敵対する存在としてとらえ，しかも自分たちをすでに蝕んでいるものととらえた世代が，近代日本においてはじめて登場したという意味である．世界の中の日本の位置が，これ以上ないほど単純直接に保田の自己認識に反映しているのである．そしてその特徴は，ドスト

エフスキーのように現実政治に強い関心を払うのではなく，自己の来歴と民族の伝統にさかのぼるというところにあった．

保田は現実政治に背を向けて民族文化の伝統を注視したのであるが，日本の近代文学は現実社会に背を向けて個人の内面を注視するという方法を生み出していた．自然主義から私小説への流れがそれである．田山花袋の「蒲団」がそうであったように，自己の内面の注視のかなめにあったのは，ありのままの醜い自己をさらけだすこと，いわばカミングアウトだった．そしてこの流れが生まれるのと同じころ，やはり現実社会から距離をおく立場の思想がうまれた．それは宗教的であれ，形而上的であれ，人間存在の意味を問うという立場である．綱島梁川の「予が見神の実験」が発表されたのは1905年のことだった．

人間存在の意味を問うことは，日露戦争前後に，「煩悶青年」が登場するころから，日本文学の重要なテーマのひとつになっていた．そういう時代もふくめて40年間ほどの文学青年の精神史を考えてみると，現実政治のうごきを視野に入れないか，または遠景においてとらえるという思考様式が，近代日本文学の大きな底流としてうかびあがってくる．それは旧制高校のドイツ哲学的なロマン主義とも相応している．カント哲学は市民社会の哲学としてとらえられるのではなく，純粋に個人的な認識と道徳の哲学としてとらえられた．「わが頭上の輝く星とわが内なる道徳律」という『実践理性批判』のカントの言葉はまさしく額面通りに受けとめられたのである．

こういう思考様式は，さまざまの変奏を生みながら，文学観の底流をなしたといっていい．底流とは，若い文学者にとって文学修行の必須科目だったという意味である．1927年7月に芥川龍之介が「ぼんやりした不安」という言葉を残して自死した．35歳だった．芥川が自殺する数ヶ月前に金融恐慌がおこっており，こうした昭和初年の世相もあって，芥川の自殺は人びとのこころに暗い影を落としたが，そのころ20代だった世代，つまり保田や亀井より少しばかり年上の文学者たちにとっては，「ぼんやりした不安」は彼ら自身の精神の危機につながっていた．たとえば梶井基次郎（1901～1932）が友人の中谷孝雄に宛てた手紙のなかに「信仰か虚無かの瀬戸際にいる」ということばがみえる．梶井の関心は人間存在の意味を探求する哲学的な問いに導かれていたのである．

同世代の文学者として同様の危機を経験した文学者を思いつくままにあげるとすれば，井伏鱒二（1898～1993），石川淳（1899～1987），中野重治（1902～1976），小林秀雄（1902～1983）といった名前が浮かんでくる．小林秀雄が「私小説論」（1935年）で使った「社会化された私」などは，まさしく当時の文学者の特徴を言い当てようとしたことばだった．そして小林秀雄自身が，1940年代になると日本浪曼派の立場にいちじるしく接近することになるのである．

10. 庶民蔑視と至誠の不気味な組合せ

保田與重郎の文章には厭世観が漂っている．そう感じさせるのは，保田が死生を超越しているような文体で書いているからである．保田の文章は，死を恐れない人間の目に世界はどうみえるか，ということを暗示するのである．同時に，そこには産業文明に背を向けている語りの響きがある．明治以後，無数の人びとが欧米諸国にわたって技術や知識を学び，産業をおこしたり制度をつくったり学校を設立したりしてきた．またそれに数千倍数万倍する人びとが，自分の生業の発展をめざして鋭意努力創意工夫し，日々のくらしが少しでもよくなるように願ってあくせくと働いてきた．保田の文章には，そういう人びとのすべての営為を退けてしまう響きがある．厭世観とでもいうほかないだろう．

1941 年 4 月に発表された「文化の創建と学徒」は，今日の問題は複雑に錯綜しているようにみえるが，事態がもっと切迫してくれば単純明快になる，「至誠を以てなす」，それだけだ，という主張ではじまる．この評論が実際に書かれたのは 1941 年 1 月か 2 月のことであろうから，年表を開いて文化関係のできごとだけを拾ってみると，1 月 1 日から全国の映画館でニュース映画の強制上映が始まっている．1 月 8 日には東条陸相が「戦陣訓」を示達．2 月 26 日に情報局が総合雑誌各誌に執筆禁止者リストを示した．名前が挙げられたのは矢内原忠雄，馬場恒吾，清沢洌，田中耕太郎らであった．前年にさかのぼってみると，日本は，9 月，日独伊三国同盟締結，10 月，大政翼賛会発足となっている．そして 1941 年はどうかというと，4 月の日ソ中立条約締結から，12 月 8 日の真珠湾攻撃へと向かっていくのである．そういう時局のなかで，保田は「今日では精神の至誠以外に，思想知識の技術など殆んど考へてゐないのである」[14] と書いている．

自分は新体制のかけ声が高くなってきたころから，心に不安がきざすと，むかしの聖人の章句を思い出している．むかしの聖人は「人倫のみちが権力のために傾けられてゐる無慙な状態」に生き，その中で自分の思いを書き残した．それを読むと「けふの日をさし示すやうに感に耐へないものが多い」．保田は，むかしの聖人は乱世に生きながら，「人倫の至高を思ふ志の生成の理を描き，人倫国家の復活を悲願として考へたところの，最も高次な文化精神をあらはしてゐる」というのだが，では聖人というのはだれかというと，いくらさがしても固有名詞は出てこない．論をたどっていくと，「古典支那の思想」ということばがみえるから，孔子や荘子や伯夷叔斉や屈原などを思い起こすのだが，はたしてそうか，にわかにはわからない．だが何をもってむかしの聖人が最も高次な文化精神を体現したのかというと，保田は「さういふときの実践の指標が何であるかといへば，たゞ一語至誠に通じるものである」という．保田は聖人と諸子を区別し，諸子は権勢をよりどころとして

もっぱら策謀と文化技術を説いたとし，それに対して「至誠の立場は多く草莽に生まれたのである」[15] と述べている．こうなると，どうも孔子や孟子は聖人に数えられていないのではないかと思われてくる．このように曖昧な叙述をかさねて保田は読者を思弁的な世界へ思弁的な世界へと導いていく．そしてその頂点で，今度は一転して現実的な態度決定を迫るのである．

この場合は至誠ということになるわけだが，保田は，今日のような危機の時代には，あれやこれやの穿鑿や注釈は無用だ．必要なのは一身を国家に捧げるという単純明快な決意だ，と主張する．「我々の文化の最高なものは，国家とか民族といつた第一義の関心から出発するものでなければならぬのである．我々は末梢の技術神経の示す才能など問題とする必要がない．第一義の関心で生活するものは，庶民であれ無智者であれ，それを以て最高の叡智と考へねばならない．それは国家は多少とも常住の危機の上を歩いてゐるのである．今日はその危機が切迫して表面化してゐるばかりである．しかしこのやうな日には特に，国民の志に於て高きものを意識せねばならぬのである」[16]．

上の文章を引用しているだけでも，正直にいうと，わたしは背筋がぞっとするような気味悪さを感じる．「末梢の技術神経の示す才能」とはなにを指しているのだろうか．町工場でのものづくりに励む人びとの工夫や，小さな商店で働く人びとの接客サービスをふくめて，経済や科学のいとなみに違いない．それらをすべて「末梢の技術神経の示す才能」とひとくくりにして退けてしまうのだから，そのかぎりではひどく厭世的な態度というべきである．それなのに，それが次の瞬間には厭世観どころか，現世世俗の最たるものである国家とか民族とかに向かうのである．それも悠久の過去につながる国家や民族ではなく，今ここにあって，保田自身がさげすんでいるはずの政治の汚辱にまみれた国家であり民族なのである．

これはわたしなどのように現世をいちばん大切にする世俗的な人間にはさっぱりわからないところである．人びとの日常の努力をばっさり否定しておいて，それなのに，国家は危機に瀕しているから，なにも考えずに至誠をつくせというのだから，矛盾している．平時なら読者がこういう矛盾に辟易しないはずはないのだが，なにしろこの評論が発表されたのは日米開戦の八ヶ月前である．保田は日米戦争と日本敗戦を予期するかのようにして次のように書いている．

「日本の危機は一そう前進するだらうし，それはすべて我々の光栄の事業をさらに偉大にするための必然である．さうして国民はきつと終末感をもつて立つ以外に方法をもたない日がくるであらう」．

終末感ということばは破滅を，つまり敗戦を連想させる．ところが保田の文章はこのあと次のようにつづいていく．

「それはおそらく，国民と，天皇の間の中間に何もないといふ自覚が，国民の精神に溌剌と回想されるとき，我が民族は必ず，不可能を可能とし，絶望の極致を希望に転回するのである．その時国民は，死については武士の構想したよりさらに以前の古代を回復し，幸福を思ふときに，万葉集の歌人たちの慟哭を発見する」[17]．

飛躍の多い，意味のわかりにくい文章である．

そもそも日本浪曼派の人々には思考と政治的現実とをつなぐ重要な回路のいくつかが欠けていたのではないかと思われる．でなければ空襲下の東京で，「都心はたしかに廃墟です．しかしこの廃墟という感じには，陰惨なものは少しもありません．むしろひそかな，人を思はず微笑させるやうな希望が隠れてゐる」（亀井『日月明し』）などといった文章をおいそれと書けるものではあるまい．なぜ空襲で家族を失い家を焼かれた同胞が苦しんでいる姿を横目に，「陰惨なものは少しも」ないなどと言えるのか．読者は亀井が書いた文章のどこを読んでも，結局納得のいく説明は見いだせないだろう．

この点は日中戦争がはじまったときに「民衆は黙って事変に処した」と書いて，一見保田與重郎と似かよった立場に立っていたようにみえる小林秀雄と異なるところである．ただし小林は日米戦争がおこると，ほとんど発言しなくなった．1902年生まれの小林は国益の発露としての日中戦争には安心していられたのである．彼なりの直感でこの戦争の収支は相つぐなうと計算していたのであろう．しかし対米戦争となるとそうはいかない．彼は口をつぐむようになる．そういうことではなかったか．

理想と現実とをつなぐ回路の欠落は，本来ロマン主義の特徴というよりいくつかのタイプの政治的急進主義の特徴である．神学者のラインホルド・ニーバーは「政治の世界では天使の役目をおこなおうとするものが，実はしばしば恐ろしい野獣の振る舞いをしている」という意味のことを書いているが，理想と現実の回路の欠如はまさしく天使の役目と信じつつ野獣の行為をおこなうものに共通する特徴である．そしてそれが政治のもっとも恐ろしいところなのである．

注

1）亀井勝一郎『日月明かし』生活社，1945年7月．『近代日本思想大系36　昭和思想集Ⅱ』筑摩書房，1978年，所収．引用は同368ページ．

2）同上，368ページ．

3）1937年に松岡は書いている．満州は日本の生命線である．なぜなら「吾等の祖国日本が，三たび国運を賭してこゝに戦ひ，且遺した事業」であるから，と．松岡のいう三たびの戦いとは，日清戦争，日露戦争，そして満州事変である．（松岡洋右『満鉄を語る』第一出版社，1937年）．

4）山室建徳『軍神』中公新書，2007年．

5）エルヴィン・フォン・ベルツ，菅沼竜太郎訳『ベルツの日記』（下）岩波文庫，1979年，49ページ．

6）松岡洋右『非常時とは何ぞや』政党解消連盟出版部，1934年．松岡洋右は満州国問題を議論した国際連盟総会に首席全権として派遣された．有名な「十字架上の日本」演説がおこなわれたのはこのときであった．帰国後，松岡は代議士を辞め，政党解消連盟を結成して全国遊説をおこなう．派手な活動だったが長続きせず，35年には古巣の満鉄に総裁として戻っている．

7）『橋川文三著作集1』筑摩書房，1985年，32ページ．橋川文三もまた，若いときに保田與重郎に心酔したもののひとりだった．橋川は「私たちが日本ロマン派＝保田にいかれた事情」といかれたと書いている（同上19ページ）．自分がどうして保田の文章に惹かれたのか，その理由を追及して書かれたのが『日本浪曼派批判序説』であった．

8）吉本隆明は少年時代に愛読した高村光太郎を論じた評論の中で次のように書いている．「わたしは徹底的に戦争を継続すべきだという激しい考えを抱いていた．死は，すでに勘定に入れてある．年少のまま，自分の生涯が戦火のなかに消えてしまうという考えは，当時，未熟ななりに思考，感情のすべてをあげて内省し分析しつくしたと信じていた．もちろん論理づけができないでは，死を肯定することができなかったからだ．死は恐ろしくはなかった．反戦とか厭戦とかが，思想としてありうることを，想像さえしなかった．傍観とか逃避とかは，態度としては，それがゆるされる物質的特権をもとにしてあることはしっていたが，ほとんど，反感と侮蔑しかかんじていなかった」『吉本隆明全著作集8』勁草書房，1973年，139ページ．

　また神島二郎と桶谷秀昭は対談で，敗戦を迎えたとき，前線でたたかっていたか，学校に通っていたかなど，わずかの世代差によって態度が違ったと語り合っている．神島二郎対談『天皇制の政治構造』三一書房，1978年，96–98ページ．

9）『三島由紀夫全集　第30巻』新潮社，1975年，429ページ．

10）吉田裕『日本軍兵士』中公新書，2017年．

11）この文章がみえる『近代の終焉』は，日米開戦直前の1941年11月に刊行された．それ以前の約1年間に発表された19編の評論が収録されている．引用は『保田與重郎全集　第11巻』講談社，1986年，300ページ．

12）『保田與重郎全集　第7巻』講談社，1986年，16ページ．

13）亀井勝一郎『我が精神の遍歴』養徳社，1948年．引用は角川文庫版，1974年，32ページ．

14）『保田與重郎全集　第11巻』講談社，1986年，373ページ．

15）同上，374ページ．

16）同上，375ページ．

17）同上，123–124ページ．